

オルガノン要約 § 82～§ 99

§ 82 ホメオパシーはソーラに対して治療すべき多数の病気のもつ本質に近づいた。しかしこれから慢性病の診察可能な症状とその特性を注意深く理解していかなければならない。

真の治療はそれぞれの症例を厳密に特有の処置（個別化）をすることから始まる。

急性病の場合は、おのずからほとんど全ての情報が提示される。

慢性病の場合は、症状を見つけ出すことさえ困難である。

< ケーステイキング (§ 83～99) >

§ 83 症例を”個別化”したものとして捉えるためには・・・

- A) 偏見を持たないこと。
- B) 健全な分別を持つこと。
- C) 症状像を注意深く観察すること。
- D) 忠実に記録すること。

§ 84 セッションでの心構え：

- A) 感覚器官を総動員して、
- B) 患者に起こった変化と異常を
- C) 患者と同じ表現で、
- D) 全てを、
- E) 正確に記録する。
- F) 自分は黙ったままで、患者と家族に話をさせる。
- G) 話をさえぎってはならない。

§ 85 カルテ記載時は改行すること。

全ての症状は、後で書き加えられるよう一つずつ離して記載すること。

§ 86 患者が話したいこと（症状）を全て話したらそれを質問で具体化していく。

例) 「いつからその症状が始まりましたか?」「どんな痛みですか?」

§ 87 「はい」「いいえ」で答えるような質問はしてはいけない。半分しか本当でないときもどちらかにしなければならないから。即答できるような質問も良くない。患者が誤ることもあるから。

(注) 「～ではないですか?」という質問は誘導的になるのでしてはならない。

§ 88 症状の全体像を得るために、足りないところは一般に使われている言葉で質問しなければならない。

(注) 例) 「便の出はどうですか?」「昼間や夜の睡眠はどうですか?」「心の状態、気分、

思考力はどうですか?」「一番おいしい食べ物と飲み物は何ですか?」

§ 89 唯一信頼が置けるのは患者の言葉のみである。患者の話すことに全幅の信頼を置くこと。

(注) 個々の症状について詳しく聞いていく例。非常に具体的で有用なガイド。

§ 90 カルテには医師が気づいたことも記入する。それが以前の状態から変化したものなのかを確認すること。

(注) 医師が気づくことの具体例

§ 91 本来の病的形態を真に徹底して理解するためには、薬に攪乱されていない状態の患者を診ること。可能なら断薬する。

§ 92 危険で一刻の猶予もない場合は、断薬して影響が消えるまで待つてはならない。そのときは薬の影響も含めた全体像をまとめ、それに合ったレメディを使うこと。

§ 93 病気がある注目すべき出来事によって引き起こされたのであれば、本人や家族から慎重に聞き出すことができるだろう。

(注) 話したくない理由の場合もあるだろうから、言い回しには機転を利かせること。

§ 94 患者の生活環境の中に病を維持させるものがないか考慮すること。

(注) 女性の場合、特に月経と心身との関係性に関して問診し忘れてはならない。その具体的質問例。

§ 95 たとえ患者にとってありふれた症状だとしても厳密に調べなければならない。慢性病の患者は、その状態に慣れすぎているため、それが病気と関係するとは思ってもよらないことがある。

§ 96 症状を誇張する患者もいる。

(注) これも特徴だということもできる。精神錯乱や仮病との分別が必要だが。

§ 97 逆に症状を抑えめにあるいは曖昧に表現したりする患者もいる。

§ 98 患者の言葉は絶対的に信頼できるものである。周辺情報は変化したり、間違いだったりするから、長患いの患者に対し、症状像を正確に捉えるには、用心深さ、観察力、慎重な問診、忍耐強さが要求される。

§ 99 急性の病気・症状は患者の記憶に鮮明に残っているので、それほど探求しなくても大部分話してくれる。